

伝子約 550 種をスポットしたマイクロアレイによる遺伝子発現様相の比較を行った。研究遂行は当施設倫理委員会の承認のもと、患者には研究の主旨に協力の同意を得て行った。結果：OSCC 組織の遺伝子発現の主な様相として、ケラチン遺伝子群の発現減少、マトリックスメタロプロテアーゼ群 (MMPs) とプラスミノーゲンアクチベーターの増加、その他、癌遺伝子、細胞外基質および細胞接着分子、成長因子関連分子など、いくつかの遺伝子において全症例に共通した増加あるいは減少がみいだされた。今回は、それらの遺伝子発現様相をもとに、OSCC の病態像と予後判定因子について検討する。

5 進行・再発胃癌に対する TS-1 の治療効果と有害事象

大橋 学・梨本 篤
藪崎 裕・瀧井 康公 (県立がんセンター)
土屋 嘉昭・田中 乙雄 (新潟病院外科)

【目的】新規経口抗癌剤 TS-1 の治療効果と有害事象とを検討した。

【対象と方法】当科で TS-1 が投与された胃癌 46 例のうち、評価可能な 31 例 (遺残・再発患者 25 例, 術前患者 6 例) を対象にした。

【結果】遺残, 再発患者 25 例中, 23 例に先行化学療法が施行されていた。奏効例はなく, 8 例に NC が得られたのみであった。NC 例の持続期間は平均 117 日で 5 例が生存中である。Grade 3 以上の有害事象は, 白血球数 4%, Hb 値, 血小板数が 8%, 食欲不振, 皮膚異常が 4% であった。術前患者 6 例中, 5 例に手術が施行され, 組織学的に Grade 3 が 1 例認められた。Grade 3 以上の有害事象は発生しなかった。

【まとめ】遺残・再発胃癌に対する TS-1 による治療は, 奏効例はなく, 高度有害事象の発生率も高かった。しかし, NC 例では平均 117 日の持続が得られた。一方, 術前治療は高度な有害事象もなく, 組織学的に著効が確認された例もあった。

6 高度進行食道癌および切除後再発例に対する化学療法の成績

内藤 哲也・西巻 正
桑原 史郎・小杉 伸一
石川 卓・小向慎太郎
清水 孝王・本間 英之
中川 悟・神田 達夫 (新潟大学医学部)
鈴木 力・島山 勝義 (第一外科)

当科では高度進行食道癌および切除後再発例に対し, 切除率, 延命効果の向上を図るため FAP/FAN 療法, Nedaplatin/5-FU 療法を施行している。臨床効果は奏効率 53% で, 切除率 80% であった。一方, 毒性で顕著なものはなく, Grade 3 が 2 例, Grade 2 が 8 例, Grade 1 が 3 例にとどまっている。今回, FAN 療法が著効し, 切除術が可能となった Stage IVa 高度進行食道癌 T4N3M0 症例および Nedaplatin/5-FU 療法が著効し, 切除術が可能となった遠隔転移を有する Stage IVb 食道癌 T4N3M1 (両側肺転移) 症例を経験したので報告する。

7 食道表在癌の放射線治療成績

末山 博男・山ノ井忠良 (県立中央病院 放射線治療部)
山崎 国男・内藤 彰
藤原 敬人 (同 内科)

1993 年から 99 年まで当科で治療した食道表在癌は 24 例で, そのうち 5 例は遠隔転移を伴っており, 根治的照射を行った 19 例を今回の検討対象とした。深達度分類は, EMR, 生検病理組織, 内視鏡所見, バリウム造影を参考として, m 癌と sm 癌に分類した。m 癌 6 例, sm 癌 13 例であった。治療法は照射単独が 14 例で, 放射線化学療法が 5 例であった。全例 CR が得られた。再発は 5 例で, 2 例が局所で, 残りは遠隔であった。m 癌の局所制御率は 100% で, sm 癌のそれは 80% と良好であった。また m 癌は 1 例他病死したのみで, sm 癌の 2 年・5 年生存率は 62%, 49% であった。放射線治療は食道表在癌の根治的治療になりうるし, sm 癌の治療成績改善のためには 1 日 2 回照射や化学療法の同時併用等積極的治療が望まれる。